

アジア鑄造技術史学会

研究発表概要集 第14号



2021

高岡大会 -WEB 発表-

会期 2021年8月21日(土) ~ 9月5日(日)

The Society for the History of Asian Casting Technology

アジア鑄造技術史学会 아시아 주조 기술사학회 亚洲铸造技术史学会

The research must go on

2019年末に始まったコロナ禍は現在も猛威をふるい、変異種が複数確認されるなど、いまだ出口が見えない状況にあります。その一方、ワクチンの接種もようやく始まり、終息に向けての期待は高まりつつあります。アジア鑄造技術史学会高岡大会は当初、2020年8月に開催する計画でしたが、コロナ禍によって開催延期を余儀なくされました。2021年になっても大勢が集まる形での通常の学会活動ができない状況が続いておりますが、我々は研究の歩みを止めるわけにはいきません。そこで、第14回大会はWEB上で開催することにいたしました。発表エントリーいただいた皆様には心より感謝申し上げます。いろいろ制限された中での発表となりますが、できるだけ活発に討論をしていただき、十分な成果に繋げられることを祈っております。

本来なら、400年以上続く鑄物産業が文化を牽引してきた街 高岡において、皆さんとお会いできるはずでした。折角の機会ですから、高岡鑄物の歴史を簡単に紹介させていただきます。高岡の鑄物の起こりは1611年に遡ります。加賀前田家二代目藩主、前田利長が産業政策の一環として、7名の鑄物師を高岡に招いたことが発端です。当初は、鍋・釜・鋤といった鉄鑄物が主要産品でしたが、宝暦(1751)年間以降、仏具や梵鐘など、銅鑄物がつくられるようになったといわれています。明治維新以降、彫金師らが彫金や象嵌の技術を、刀の鏝や目貫、鎧などへの加飾から、豪華絢爛な花器などの制作に活かしていったことで、高岡銅器はウィーンやフィラデルフィア、パリなどで開催された万国博覧会で高い評価を得ました。そうした職人の技術は今日も受け継がれており、1975年には伝産法に基づいた「伝統的工芸品」に指定されました。現在は、銅合金だけではなく、アルミ鑄物によるエクステリア製品やチタンやコバルトクロム合金による医療用インプラント素材、錫を用いたデザイン性に優れる生活用品など、様々な展開を見せています。

今回、高岡での開催を見送らざるを得なかったことは残念なのですが、またいつか、文化創造都市を標榜する高岡において学会開催を再度計画し、鑄造技術史について討論できることを楽しみにしております。最後に、今回のWEB開催にあたっては、コロナ禍で大変ななか、実行委員の皆様には大変ご尽力をいただきました。深く御礼申し上げます。

2021年8月

アジア鑄造技術史学会 2021 高岡大会実行委員長

長柄 毅一